

吾輩は猫である 夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたかほとんど見当がつかぬ。なんでも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。

〈吾輩は生まれてすぐに捨てられ、食べ物を探して歩くうち、竹垣の崩れた穴から、とある邸内に入り込んだ。何度もつまみ出されたが、主人の「うちへおいてやれ。」のひと言で、その屋敷に住みつくこととなった。主人は胃弱の教師である。〉

吾輩がこのうちへ住み込んだ当時は、主人以外の者にははなはだ不人望であった。どこへ行ってもはねつけられて相手にしてくれなかった。いかに珍重されなかったかは、今日こんにちにいたるまで名前さえつけてくれないのでもわかる。吾輩はしかたがないから、できうる限り吾輩を入れてくれた主人のそばにすることを努めた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼のひぎの上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きというわけではないが、別にかまい手がいなかったからやむをえんのである。その後いろいろ経験のうえ、朝は飯びつの上、夜はこたつの上、天気の良い日は

縁側へ寝ることとした。しかしいちばん心持ちのいいのは夜に入ってこのうちの子どもの寝床へ潜り込んで一緒に寝ることである。この子どもというのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入ってひと間へ寝る。吾輩はいつでも彼らの中間におのれを容るべき余地を見いだしてどうにかこうにか割り込むのであるが、運悪く子どもの一人が目覚めますが最後大変なことになる。子どもは——ことに小さいほうがたちが悪い——猫が来た猫が来たと言って夜中でもなんでも大きな声で泣きだすのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず目を覚まして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどはものさしでしりぺたをひどくたたかれた。

吾輩は人間と同居して彼らを観察すればするほど、彼らはわがままなものだと断言せざるをえないようになった。ことに吾輩がときどき一緒に寝る子どものごときにいたっては言語道断である。自分の勝手なときは人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、ほうり出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩のほうで少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い回して迫害を加える。このあいだもちよつと畳でつめを研いだら怒られて、それから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で人が震えていてもいっこう平気なものである。吾輩の尊敬する筋向こうの白君しらくんなどは会うたびごとに人間ほど不人情なものはないと言っておらるる。白君は先日玉のような子

猫を四匹産まれたのである。ところがそのうちの書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四匹ながら捨ててきたそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話したうえ、どうしても我ら猫族が親子の愛を全くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬと言われた。いちいちもつとも議論と思う。また隣の三毛君などは人間が所有権ということを解していないと言って大いに憤慨している。元来我々同族間ではめざしの頭でもぼらのへそでもいちばん先に見つけたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えてよいくらいのものである。しかるに彼ら人間は毫もこの觀念がないとみえて我らが見つけたごちそうは必ず彼らのために掠奪せらるるのである。彼らはその強力を頼んで正当に吾人が食うべきものを奪ってすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人をもっている。吾輩は教師のうちに住んでいるだけ、こんなことに関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がかどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも榮えることもあるまい。まあ気を長く猫の時節を待つがよからう。

わがままで思い出したからちよつと吾輩のうちの主人がこのわがままで失敗した話をしよう。元来この主人は何と云ってひとに優れてできることもないが、なんにでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、まちがいだらけの英文を書いたり、ときによると弓に凝ったり、謡を習ったり、またあるときはバイオリンなどをブービー鳴らしたりするが、気の毒なことには、どれもこれもものになつておらん。そのくせやりだすと胃弱のくせにいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生とあだ名をつけられていにも閑せずいつこう平気なものでやはりこれは平宗盛にて候を繰り返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考えになったものか吾輩の住み込んでからひと月ばかりのちのある月の月給日に、大きな包みを提げて慌ただしく帰ってきた。何を買ってきたのかと思うと水彩絵の具と毛筆とワットマンという紙で、今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心とみえた。果たして

翌日から自分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかきあげたものを見ると何をかいたものやらだれにも鑑定がつかない。当人もあまりうまくないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来たときに下のような話をしているのを聞いた。

「どうもうまくかけないものだね。ひとのを見るとなんでもないようだが自ら筆を執つてみると今さらのように難しく感ずる。」これは主人の述懐である。なるほど偽りのないところだ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、だいいち室内の想像ばかりで絵がかかるわけのものではない。昔イタリーの大家アンドレアルデルサルトが言ったことがある。絵をかくならなんでも自然そのものを写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに鳥あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだきみも絵らしい絵をかこうと思ふなら、ちと写生をしたら。」

「へえ、アンドレアルデルサルトがそんなことを言ったことがあるかい。ちつとも知らなかった。なるほどこりやもつともだ。実にそのとおりだ。」と主人はむやみに感心している。金縁の裏にはあざけるような笑いが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく縁側に出て心持ちよく昼寝をしていたら、主人が例になく書齋から出てきて吾輩の後ろでなにかしきりにやつておる。ふと目が覚めて何をしているかと一分ばかり細めに目を開けて見ると、彼は余念もなくアンドレアルデルサルトを決めこんでいる。吾輩はこのありさまを見て覚え失笑するのを禁じえなかつた。彼は彼の友に押揃せられた結果としてまず手始めに吾輩を写生しつのである。吾輩はすでに十分寝た。あくびがしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつとしんぼうしておつた。彼は今吾輩の輪郭をかきあげて顔のあたりをいどつてい。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘のきではない。背といひ毛並みといひ顔の造作といひ、あえて他の猫にまさるとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思

われない。だいいち色が違う。吾輩はペルシャ産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけはだれが見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければとび色でもない、さればとてこれらを混ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。そのうえふしぎなことは目が描かれていない。もっともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが目らしいところさえ見えない。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレアルデルサルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるをえない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思ったが、さつきから小便がもよおしている。身内の筋肉はむずむずする。もはや一分も猶予ができぬ仕儀となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してあゝあと大なるあくびをした。さてこうなってみると、もうおとなしくしてもしかたがない。どうせ主人の予定はぶち壊したのだから、ついでに裏へ行つて用を足そうと思つてのそのそはい出した。すると主人は失望と怒りをかき混ぜたような声をして、座敷の中から「このばかやろう。」とどなった。この主人はひとをのしるときは必ずばかやろうというのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだからしかたがないが、今までしんぼうした人の気も知らないで、むやみにばかやろう呼ばわりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乗るときに少しはいい顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になることはなにひとつ快くしてくれたこともないのに、小便に立ったのをばかやろうとはひどい。元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出てきていじめてやらなくてはこの先どこまで増長するかわからない。

トロッコ 芥川龍之介

小田原・熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を——といったところが、ただトロッコで土を運搬する——それがおもしろさに見にいったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後ろにたたずんでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走ってくる。あおるように車台が動いたり、土工のはんてんの裾がひらついたり、細い線路がしなったり——良平はそんな景色を眺めながら、土工になりたいと思うことがある。せめては一度でも土工と一緒に、トロッコへ乗りたいと思うこともある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然とそこに止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いのか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はそのとき乗れないまでも、押すことさえできたらと思うのである。

ある夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、その他はどこを見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、いちばん端にあるトロッコを押しした。トロッコは三人の力がそろると、突然ごろりと車輪を回した。良平

はこの音にひやりとした。しかし二度めの車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、——トロッコはそういう音とともに、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登っていった。

そのうちにかれこれ十間ほど来ると、線路の勾配が急になりだした。トロッコも三人の力では、いくら押ししても動かなくなった。どうかすれば車と一緒に、押し戻されそうにもなることがある。良平はもういいと思ったから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼らは一度に手を放すと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初おもむろに、それからみるみる勢いよく、ひと息に線路を下りだした。そのとたんに突き当たりの風景は、たちまち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開してくる。顔に当たる薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、——良平はほとんど有頂天になった。

しかしトロッコは二、三分のち、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ。」

良平は年下の二人と一緒に、またトロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かないうちに、突然彼らの後ろには、誰かの足音が聞こえだした。のみならずそれは聞こえだしたと思うと、急にこういうとなり声に変わった。

「このやろう！ 誰に断ってトロコに触った？」

そこには古い印しほぼんてんに、季節外れの麦わら帽をかぶった、背の高い土工がたたずんでいる。——そういう姿が目に入ったとき、良平は年下の二人と一緒に、もう五、六間逃げ出していた。——それぎり良平はつかいの帰りには、人けのない工事場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思ったことはない。ただそのときの土工の姿は、今でも良平の頭のどこかに、はっきりした記憶を残している。薄明かりの中にほのめいた、小さい黄色い麦わら帽、——しかしその記憶さえも、年ごとに色彩は薄れるらしい。

そののち十日余りたつてから、良平はまたたつた一人、昼過ぎの工事場にたたくみながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの他に、枕木を積んだトロッコが一両、これは本線になるはずの、太い線路を登ってきた。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼らを見たときから、なんだか親しみやすいような気がした。「この人たちならば叱られない。」——彼はそう思いながら、トロッコのそばへ駆けていった。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——しまのシャツを着ている男は、うつむきにトロッコを押したまま、思ったとおり快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間に入ると、力いっぱい押し始めた。

「われはなかなか力があるな。」

他の一人、——耳に巻きたばこを挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。

そのうちに線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくともいい。」——良平は今にも言われるかと内気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起こしたぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえきれずに、おずおずこんなことを尋ねてみた。

「いつまでも押していい？」

「いいとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思った。

五、六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実が幾つも日を受けている。

「登り道のほうがいい、いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

みかん畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。しまのシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ。」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑の匂いをあおりながら、ひた滑りに線路を走りだした。「押すよりも乗るほうがずっといい。」——良平は羽織に風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」——それも考えたりした。

竹やぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹やぶはいつか雑木林になった。つま先上がりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった。その道をやつと登りきったら、今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来すぎたことが、急にはつきりと感じられた。

三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走っていった。しかし良平はきつきのように、おもしろい気持ちにはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行き着かなければ、トロッコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

その次に車の止まったのは、切り崩した山を背負っている、わら屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へ入ると、乳飲み子をおぶったかみさんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は一人いらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ね返った泥が乾いていた。

しばらくのち茶店を出てきしなに、巻きたばこを耳に挟んだ男は、（その

ときはもう挟んでいなかったが) トロツコのそばにいる良平に新聞紙しんぶんがみに包んだ駄菓子だかしのをくれた。良平は冷淡に「ありがとう。」と言った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂いがしみついていた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜を登っていった。良平は車に手を掛けていても、心は他のことを考えていた。

その坂を向こうへ下りきると、また同じような茶店があつた。土工たちがその中へ入つたあと、良平はトロツコに腰を掛けながら、帰ることばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる。」——彼はそう考えると、ぼんやり腰掛けてもいられなかつた。トロツコの車輪を蹴つてみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押ししてみたり、——そんなことに気持ちこころを紛らせていた。

ところが土工たちは出てくると、車の上の枕木に手を掛けながら、むぞうさに彼にこう言った。

「われはもう帰んな。俺たちは今日は向こう泊まりだから。」

「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するぞう。」

良平は一瞬間あつげにとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮れ母と岩村まで来たが、今日の道はその三、四倍あること、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならぬこと、——そういうことが一時いちじにわかつたのである。良平はほとんど泣きそうになつた。が、泣いてもしかたがないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つてつけたようなおじぎをすると、どんだん線路つたいに走りだした。

良平はしばらく無我夢中に線路のそばを走り続けた。そのうちに懐ふしの菓子包みが、じゃまになることに気がついたから、それを道端へ放り出すついでに、板草履もそこへ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食い込んだが、足だけははるかに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂道を駆け登つた。ときどき涙がこみあげてくると、自然に顔がゆがん

でくる。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹やぶのそばを駆け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もうほてりが消えかかっていた。良平はいよいよ気が気でなかつた。行きと帰りと変わるせいか、景色の違うのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗のぬれ通つたのが気になつたから、やはり必死に駆け続けたなり、羽織を道端へ脱いで捨てた。

みかん畑へ来る頃には、辺りは暗くなる一方だつた。「命さえ助かれば。」——良平はそう思いながら、滑つてもつまずいても走つていった。

やっと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えたとき、良平はひと思いに泣きたくなつた。しかしそのときもベそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。

彼の村へ入つてみると、もう両側の家々には、電灯の光がさし合つていた。

良平はその電灯の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水をくんでいる女衆や、畑から帰つてくる男衆は、良平があえぎあえぎ走るのを見ては、「おい、どうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼のうちの門口へ駆け込んだとき、良平はどうとう大声に、わつと泣きださずにはいられなかつた。その泣き声は彼の周りへ、一時に父や母を集まらせた。殊に母はなんとか言いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、すすりあげすすりあげ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三、四人、薄暗い門口へ集まつてきた。父母はもちろん、その人たちは、口々に彼の泣くわけを尋ねた。しかし彼はなんと言われても泣き立てるよりほかにしかたがなかつた。あの遠い道を駆け通してきた、今までの心細さを振り返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気持ちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子と一緒に東京へ出てきた。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆しゅひつを握つている。が、彼はどうかすると、全然なんの理由もないのに、そのときの彼を思い出すことがある。全然なんの理由もないのに？

——塵勞^{じんろう}に疲れた彼の前には今でもやはりそのときのように、薄暗いやぶや
坂のある道が、細々と一筋断続している。……………

◆ 出典 『芥川龍之介全集 第五卷』（筑摩書房、一九八七年）